

ベルクソン哲学における潜在性の観念について

神 山 薫

はじめに

ベルクソンは、その第二主著『物質と記憶』において、独特の記憶論を展開している。そこで登場する「潜在的virtuel」⁽¹⁾「潜在性virtuaite」という語の具体的な内実を、「純粹記憶souvenir pur」概念の規定を確認することを通じて検討し、この「潜在性」という観念が、ベルクソンの記憶論において、⁽²⁾ひいてはベルクソン哲学全体のなかで担っている理論的役割を浮かび上がらせること、これが本稿の目的である。

本論への導入として、ここではまず、ベルクソン哲学について論じるのに「潜在性」という観念を取り上げることについて、そして、この観念を具体的に検討するにあたり

『物質と記憶』というテキストを選択することについて、簡単に理由を説明しておきたい。

実をいえば、ベルクソン自身の諸論考においては、この「潜在性」という観念そのものに対して積極的に焦点が当てられたことはないのであり、本稿がこれより扱う『物質と記憶』というテキストもまたそうした事情を免れるものではない。むしろこのテキストは、「潜在性」という語に明確な定義を与えぬままにその語を多用しつつ、しかしそのことを通じて「潜在性」という語において表現されるものをその豊かなニュアンスと共に浮き彫りにしていく、そのような種類のテキストであるとさえいえるように思われる。ベルクソンのテキストのこうした性質から、本稿の議論構成が、つまり、ベルクソン哲学における「潜在性」を

「純粹記憶」概念の規定を確認することによって明らかにする、という議論構成が出てくるわけである。また、持続する存在であるわれわれが背後に引き摺っている膨大な「過去」、すなわち「純粹記憶」に付される「潜在的」という形容辞の内実を、「持続」における「過去・現在・未来」という時間了解とこの三項の交渉関係という観点から検討することによって、ベルクソン哲学の枢要をなす「持続」という時間性の持つリアリティについても、幾分かまともった見解を呈示できるのではないだろうか。——以上が、「ベルクソン哲学における潜在性」を主題として論じること、ならびに『物質と記憶』というテクストを選択することの理由となっている。

では、本稿全体の大まかな構成を示しておこう。まずは、「純粹記憶」と対比的に区別される「現在」の時間性についての議論を整理した上で（一私の現在）、次に、「潜在性」の観念がベルクソンの記憶論において果たしている機能について具体的な検討を行ない（二記憶論と潜在性）、最後に、この機能が、ベルクソン哲学における他の問題系においても一定の役割を果たしていることを確認する（三ベルクソン哲学における潜在性の観念について）。

一 私の現在

『物質と記憶』第三章、主に前半部分において、ベルクソンは、「純粹記憶」の存在様態を「本質上潜在的 *essentially virtuel*」(MM, 149)であるとした上で、それと明確に区別される「現実的／顕在的 *l'actuel*」な「現在」を規定することから具体的な議論を始めている。われわれの意識によって現に生きられている「現在」と、流れつつある「持続」のなかに観念的に想定されうるに過ぎない「数学的瞬間 *instant mathématique*」(MM, 152) すなわち「純粹現在 *présent pur*」(MM, 167) とが論じ分けられつつ、前者についての規定を通して、私の意識がそれとして把握している「現在」の時間性についての記述が展開する。——以下に、ベルクソンの見地による「私の現在」の素描を試みる。

一・一 瞬間的再認の場としての身体

私が「現在」とみなすところの時間、私の意識に現われている「現在という瞬間」とは、どのような時間の様態においてあるのだろうか。ここで問題になっているのは、「未来

と過去を分かち不可分の境界 *limite indivisible qui sépare le passé de l'avenir* (MM, 166) と規定される「純粹現在」であるよりも、むしろ、われわれによって生きられたつつある具体的な「現在」のリアリティである。この「現実的 *réel*」(MM, 152)な「現在」が、流れつつある「持続」のなかに観念的に措定しうる点的現在としての「数学的瞬間 *instant mathématique*」(MM, 152)には収まり切らない時間的幅を有していることは、一般に了解されるであろう。というのも、われわれが単純なものとして把握している「現在という瞬間」には、実際は、人間の知覚能力には捉えられない、よりミクロな無数の瞬間が継起している筈であり、そのような継起は——継起であるがゆえに——必然的に「一定の持続 *une certaine durée*」(MM, 30)を占めるものだからである。逆にいえば、等質的な無数の振動へと解体されるような、ゆえにわれわれのそれとは異なるような持続のリズムを有する物質を知覚する場合、われわれは、自身の持続のリズムに即しつつ、物質の有する時間的幅を「収縮 *contracter*」すること⁽⁵⁾で、これをひとつの感覚質として捉えているのである。

次節を一部先取りするかたちで述べるとすれば、こうし

て捉えられた感覚は、身体に蓄積された習慣的な運動機構を触発することを通じて、その運動機構の発現として、ただちに——いかなる記憶をも顕在的には介入させることなく——行動へと延長されるだろう⁽⁶⁾。私の身体は、知覚することによって、感覚をおぼえると同時に運動を演じる (MM, 103) わけである。身体のみでなしうる「瞬間における再認 *reconnaissance dans l'instantané*」(MM, 100)とは、過去の資格で想起するのではなく、ただひたすら身体によって記憶を再生することに他ならない。「私の現在とは、本質からいって、感覚—運動的」(MM, 153)であり、それが存するのは「私が私の身体についても意識」(*avid*)である、というベルクソンによる規定の内実も、まさしくこの種の再認を受けてのものであろう。

以上の論点をひとまず総合してみるならば、「私の現在」を、次のような構造を持つものとして記述することができ。すなわち、「私の現在」とは、一方では「感覚」の厚みとしての「過去」⁽⁷⁾を持ち、他方で「運動」が向かう先として観念的に先取りされている「未来」への傾きを有している、しかしそれ自体としては「ひとつの不可分の全体」(MM, 153)をなすところの「未来を侵食する過去の捉え

がたい進展 *insaisissable progrès du passé rongeant l'avenir* (MM, 167) なのである。そして、その内実を占めるのは、感覚とそれが展開される運動とによって絶えず組み直される、所与の瞬間における感覚—運動システム、要するに、知覚の現場であると同時に再認の現場でもある「身体」である、というわけだ。

一・二 習慣という時間性

ところで、瞬間における身体的再認が成立するにあたっては、感覚—運動的な連繫を身体内に組織するための一定の時間が必要となるのが容易に想像されるわけであるが、そうした感覚—運動的な連繫は、「反復的な「努力」」(MM, 84) の過程を経て「習慣」(cf. *habitude*) として身につけられてしまえば、時間を占めていくと意識されることはもはや殆どないといってよいであろう。そしてそのことを通じて、この身体的再認は、時間の流れのなかで過去のある時点において身につけられたものであるにもかかわらず、「私の現在の一部分をなし」(MM, 85)、「過去におけるその起源を洩らすような」[...]「痕跡をまったくとどめていない」(*ibid.*)⁽⁸⁾ ようなものとなってしまうのである。とはい

え、このプロセスは、ステイティクな観念と化した、自己同一的な——つまりは非時間的な——永遠性へとわれわれを差し向けてしまうわけではもちろんない。むしろこの種の再認をめぐる一連のプロセスによって露になるのは、表象のかたちでは喚起されていない記憶がもたらす身体によって「生きられる」という様態そのものである。⁽⁹⁾ 過去が過去として意識されないままに再生されている状態、そこにおいて成立している時間性を、ベルクソンは「絶えず再開する現在 *présent qui recommence sans cesse*」(MM, 168) と名づけている。「反復」により身体に蓄積された運動機構は、必要に応じて自動的に再現され、そのことによって絶えず全体的に組織し直されることになる。「現在」の時間性とは、過去の資格で想起される記憶を締め出す再認能力としての「身体の記憶力 *mémoire du corps*」(MM, 169)、「すなわち「習慣」によって構成されるものである」。

一・三 私の現在

「習慣」として「絶えず再開する現在」。——それは所与の瞬間における「私」という存在の「物質性そのもの」

(MM, 154) に他ならないとベルクソンはいう。このテーゼをどのように解釈することができるだろうか。

ただちに、以下のような疑問が生じてこよう。すなわち、われわれによって生きられる現在とは、物としての身体に尽きてしまうものだろうか、と。

実際、ベルクソン自身がそのように主張しているかのようないくつかの誤解を招きうる表現がないわけではない。しかし、同時にまた、もっぱら身体によって演じられるだけの「絶えず再開する現在」という時間性にさえ、「私の生成の現実的状态 *état actuel de mon devenir*」(*ibid.*) という規定が与えられていることにも注意する必要があるだろう。「習慣」として「絶えず再開する現在」は、それがつねに「直接的な未来に対する私の態度 *mon attitude vis-à-vis de l'avenir immédiat*」(差) 迫った私の行動 *mon action imminente*」(MM, 156) として実現するものであるという資格において「現実性 *actualité*」を持ちうるのである。そうである以上、つねに身体的習慣としてしか結実しない時間性であっても、それが文字通りの物体に解消されえないことは明白であろう。

以上のことから、次のようにいえることができるだろう。

「私の現在」が成立するのは、蓄積された記憶が——運動機構の発現としてではあれ——運動へと展開されていく場において、すなわち、過去を現在に結びつけ未来へと向かう契機であるところの、行動する私の身体においてなのである。

二 記憶論と潜在性

ここまでの議論を確認しておこう。私によって生きられる「現在」とは、「私を行動へと促すもの *ce qui me provoque à l'action*」(MM, 152) であり、その「現在」に現実性を賦与するのは、「現在」という状況に差し込まれた私の身体である。さてでは、こうした「現在」と本質的に区別される「過去」の「根源的な潜在性 *virtualité originelle*」(MM, 148) とは、具体的にはどのような状態を指すのだろうか。また、こうした区別を、持続理論ないし、現在の意識への記憶の浸透作用というテーゼの内に位置づけ直した場合、どのようなことが言えるだろうか。

「現在の意識」(MM, 162) が「つねに行動へと向かって *Toujours tendue vers l'action*」(*ibid.*) なるというこ

は、逆にいえば、現在の意識はそのつどの状況や対象によってつねに制約を受けている、ということでもある。行動の必要性に応じて絶えず再編されるシステム、といったもよいだろう。こうして行動を目指すものである以上、意識は、行動に有用に組織化されて行動を導きうるであろうような記憶だけを喚起し、これを行動へと延長するだろう。

これに対し、差し迫った行動の源泉たる「現在」(MM, 155)とは何ら関わりをもたないような存在状態にある「純粹記憶」とは、現に意識に上ることがない以上、制約に囚われることも一切ない、さしあたりそういえそうである。したがってそれは、思弁的な性格を帯びているもの (cf. MM, 152)。つまりは、「現在」に対して無力な知ということになるだろう。

こうして、現在の行動に結実しうる記憶だけが、現実化する機会を優先的に与えられる一方で、そうして喚起される記憶は、まさに物質化して「現在」に参入することにより、状態に根本的な変化を蒙ってしまう、つまりは、「過去」であることをやるわけである。

「記憶は、現実化するにつれて、状態を変える」(MM, 151) というテーゼが、このように理解されるものである

とすれば、現実化の出発点にある潜在的な「記憶」と、現実化を経た帰結としての、いわゆる喚起された「記憶」とを区別する必要があるだろう。つまり、「現前しているもの」(MM, 154)のなかに、「過去」の痕跡を探し求めても無駄なのだ。むしろベルクソンは、「過去」が「現在」とは全く異なる——すなわち、潜在的な——状態において即自的に存続していることを改めて強調し、こうした存在状態としての「潜在性」を、差し迫った行動に直接関わらないという意味で、しばしば「無力さ」において語ろうとする。だが、それは文字通り何の力も有していないということの意味するのだろうか。過去の意識状態が「私の現在」に対して何の影響も及ぼさないなどということが、果たしてありうるのか。——本章では、「純粹記憶」の「根本的無力さ impuissance radicale」(MM, 156)について検討を行なうが、そのことによって、「過去」と「現在」、そして「記憶」と「意識」の関係も再考を促されることになるだろう。

二・一 純粹記憶

「純粹記憶」は、「感覚—運動的」な「現在」と関わらな

い限りで「本質上潜在的」に存続するといわれていた。この「純粹記憶」のより具体的な規定を確認することから始めよう。——「純粹記憶」は、身体において生きられる「私の現在」に直接働きかけてこないものであるがゆえに、「私の身体」のどのような部分とも関わりをもたない(MM, 154)。逆にいえば、私に(身体的な)態度決定を迫る「現在」の解釈に役立つ記憶だけが、意識によって物質化の機会を選択的に与えられるのであり、それ以外の全過去は非物質的な状態に押し込められているのである。

この「純粹記憶」という様態を、「意識外にある存在 en dehors en dehors de la conscience」(MM, 158)——そのような意味で、「無意識的」(MM, 156)と呼ばれうる存在⁽¹¹⁾——として呈示することによって、ベルクソンは、「現在」(意識)が「存在」と共外延的であるとはみなさない姿勢をより鮮明にする。「現在」において存在するものだけが、「存在するもの」であるという見方は、結局のところ、「現在」を特権視する態度に由来するものでしかない。こうした態度に対するベルクソンの反論は、突き詰めていえば、「意識されることをやめる」ことは「存在をやめる」ことを意味しない、というものであるだろう。「意識は存在と

同義ではない」(MM, 157)のである。

このテーゼは、記憶全体の即目的保存を根拠づけるべく導入されるものである。既に指摘したように、そうして存在し続けはするがしかし表象として思い出されているわけではない「潜在的」な記憶は、ベルクソンによって「無力」と形容されていたのだった。では、「力」をもたない記憶には、文字通り何の働きも認められないのだろうか。そもそもそれは何に対して「無力」なのだろうか。

二・二 過去と現在

前章(一)私の現在(2)で確認されたところによれば、「現在」とは、われわれに対し、何らかのかたちで身体的な態度決定を要請するものであり、この態度決定を可能にしているのが、「身体の記憶力」と呼ばれる再認能力であった。それは、反復的な努力によって身体内に蓄積される運動機構であり、行動の必要に応じて自動的に再生される。いわば「習慣が組織した感覚—運動系の総体」(MM, 169)としての記憶力である。習慣としてすっかり身につくことにより、成立までの全過程におけるあらゆる出来事についての記憶は、やがて忘却され、⁽¹²⁾「身体の記憶力」と

は直接の交渉力をもたない存在、つまり「純粹記憶」となるだろう。

この「純粹記憶 souvenir pur」を司る記憶力を、ベルクソンは「純粹記憶力 mémoire pure」(MM, 74, 170)と呼んでいる。それは、あらゆる出来事を細部にわたって自動的に記録し続け、これを無意識的狀態で保存し、時に応じて再生する、いわば「眞の記憶力」である。したがってそれは、運動機構の絶え間ない蓄積・組織化に与かる能力であるという意味で、「身体の記憶力」を始動させる「基盤 base」(MM, 169)をなすものでありつつ、自らが組織する身体よってにつねに抑制されていて、必要に依じてこれと協働することよってのみ、「現在」の局面において機能しうるものである。換言するならば、「純粹記憶力」とは、「身体の記憶力」の協力を支えることよってのみ、身体的態度決定を迫る「現在」に有用な記憶を再生しうるのだが、その一方で、この「純粹記憶力」は、たえずわれわれを差し迫った行動へ、つまりは「未来」へと促す「身体の記憶力」によって、有用な記憶以外の全過去の再生を「遮断」(MM, 161)されているのである。ベルクソンは、この「身体の記憶力」と呼ばれる再認能力に、

「純粹記憶力」によって「経験という動く平面に差し込まれた動的先端」(MM, 169)、すなわち、純粹記憶力という精神の働きによって駆動される習慣的な運動機構という規定を与えている。先端である以上、それもまた純粹記憶力の一部であろう。となると、二つの再認能力を賦活する時間性に本質的な區別を設けつつ両者の連続性を主張していることになるわけだが、まさしくこうした立場の論拠となるのが持統理論である (cf. MM169-170, 249-251)。持続する精神としての記憶力は、生成の流れの中でそのつど異なる現在の意識を継起的に産出しつつこれを細大漏らさず自動的に記録し続ける。そのことを通じて意識は記憶になり、潜在的な存在様態において保持されていく。(純粹)記憶は、身体との協働なしには経験世界において現実性を持ち得ないものである一方で、身体を通して「現在」を生きる意識を、差し迫った未来へと絶えず推し出していくのだ。こうして、身体を通して生きられる「現在」を産出しつつこれを条件づける「過去」の全履歴としての「純粹記憶」という構図が浮かび上がってくるわけである。では、その「産出」および「条件づけ」は、具体的にはどのような仕方であらうか。

二・三 力としての過去

こうした問いへの、ベルクソンの立場からの回答となりうるような箇所を、早速引いてみることにしよう。

われわれの過去の心理的生の全体は、われわれの現在の状態を、必然的な仕方で決定するのではなく、条件づけている。どのような過去の「心理」状態であれ、それとわかるかたちでわれわれの性格のうちに現れることはないとしても、やはりそこに全体で顕現しているのである。(MM, 164-5)

この見地は、差し迫った行動に遮られて「潜在的」な状態で即目的に存在する「純粹記憶」について、以下のような補足的解釈を提供しうるだろう。——「純粹記憶」を構成する過去の心理状態のそれぞれは、そのほんの一部が、「現在」の「呼びかけ *appel*」(MM, 170) に応じて物質化することはあるにせよ、すべてが個別的な記憶のかたちで意識されることはない。にもかかわらず、「過去」の記憶は「現在」の意識のうちに全体で顕現している。つまり、われわれの「過去」の全履歴は、それを構成する各々の記

憶が一気に顕在化するのではなく、絶えず全体でわれわれの意識に現前することにより、(差し迫った「現在」を解釈するべく想起される個別の出来事の記憶とは別の位相において)われわれの現在を条件づけているのである。このような見地は、少なくとも、過去のあらゆる出来事が細大漏らさず記録し続けられることによって、つまりは「純粹記憶力」が十全に機能することによって、われわれの全過去が、現在の意識に絶えず影響を及ぼしている可能性を確保しうるものだろう。——そうであるならば、「潜在性」はもはや「無力さ」においてのみ規定されるわけにはいなくなる。

以上のような見地を端的に表現しているのが、「つねに自己自身に現前している記憶力 *mémoire, toujours présente tout entière à elle-même*」(MM, 191)と「テーゼであろう。——流れつつある「持続」において生起する「現在」の意識状態を蓄積し続ける「純粹記憶力」とは、蓄積された全体としての「純粹記憶」を、あらゆる瞬間にそれ自身に現前させるといふかたちで、絶えず自己を意識し、理解する、非顕在的な認識として機能している。また、そのようにして蓄積され続ける全体としての「純粹

記憶」によってつねに突き動かされつつ、(それだけに還元し得ないにしても) いずれにせよ身体を起点にせざるを得ないわれわれの「現在」は、未来へと向かい続けるのである。したがってここには、単なる条件づけを超えた働きを読み取らざるをえない。——「純粹記憶」は、蓄積された全体として膨れ上がっていくことで「現在」を産出するとともに、決して顕在的に現れることはなく、それでいてつねに全体で「現在」へと現前することによってこれを駆動し、「未来」へと推進していく、一種の「力 puissance」⁽¹⁴⁾として機能しうるのである。

二・四 記憶論と潜在性

流れつつある「持続」の先端にあるわれわれの「現在」とは、流れ去った「過去」を絶えず、判明な意識の彼方、すなわち「純粹記憶」へと追いやり、差し迫った行動に結実しうるもの以外の記憶を「現在」から遮断している。このような見地からすれば、「過去」は、潜在的な状態において存続しているとはいわれるものの、「實際上廃棄されている prätiquement abolii」(MM, 161) かのように見えるても不思議はない。こうした相貌を帯びる際、「純粹記憶」

の「潜在性」とは、即自的な存在様態は認められつつも、「実質的には無力」という形容のみによって語られることになる。

しかしながら、「過去」の一見したところの「無力さ」を単なる「不活性 inerte」と取り違えてはならない。⁽¹⁵⁾むしろそれは、途切れることなく流れつづける「持続」が絶えず膨らみ、膨らみながらつねに自「」を意識しつつ、「現在」を産出する「力」として、機能しているのである。

「過去」はつねにわれわれと共に在り、顕在的な仕方ではないにせよ、われわれの「現在」を駆動している。このことはただちに、「過去」に囚われる「現在」という決定的論的構図を示唆するわけではない。そもそも、「持続」においては「すべてが与えられている」(BC, 38, 39) という事態がありえない以上、「未来」は、「自由」や「創造」に対してつねに開かれたものでしかありえない。あるいは、「持続」そのものが、流れつつある未来への傾きであるといってもいい。⁽¹⁶⁾そしてそのようなものであるがゆえにまた、そこには完全に目的論的な展開もありえないのである。⁽¹⁷⁾

『物質と記憶』において語られる「潜在性」とは、「過去」が「現在」と共に、しかし無意識のないし非顕在的な

仕方では存続していることを指し示すと同時に、「過去」あるいは「記憶」がそうした様相において存在する——つまり潜在する——ことよって「力」となり、つねに全体で「現在」に現れしつつ、「現在」を産出し有機的に構成し直していく、そのダイナミックな運動を捉えうる観念なのである。そして、そのように捉えられる「現在」こそ、判断としたかたちでは決して頭われえないがつねに全体で作用している「過去」の絶えざる引き受け直しと、まったく新しいものとしての「未来」の創造との接続を可能にしているものなのである。

三 ベルクソン哲学における潜在性の観念について

こうして得られた「潜在性」観念を手に、ベルクソンの他の著作を見渡してみると——すべてが主題的に論じられているわけではないにせよ——次のような問題系を浮かび上がらせることができるだろう。

ベルクソン哲学の枢要をなす「持統」概念を主題とする『意識の直接与件についての試論』では、内発的に生かされる「自我」とその発露としての「自由」を論じる場面に、⁽¹⁸⁾「潜在性」観念に織り込まれていると思われる「必然的決

定論ではない、全体での条件づけ」というテーマがすでに素描されており、このテーマは、後の『物質と記憶』を端緒とする記憶論において、過去の全履歴を漏らさず記録し続ける「記憶力」として引き継がれ、「現在」の意識状態に「凝集され condensed」(MM, 162) つねに「現在」を条件づけながらこれを産出する「力」としての性格をより鮮明に帯びることになる。この「潜在的記憶」という発想は、『創造的進化』においては、「エラン・ヴィタル élan vital」の運動をもって、生命論への展開を果たす。⁽¹⁹⁾ また、社会の存立と不可分な「力 forces」として機能する「道徳」を論じる『道徳と宗教の二源泉』第一章では、社会的あるいは文化的な記憶が潜在的ではあれつねに「現在」のわれわれへと影響を及ぼし、駆動し続けているという側面を、「閉じた道徳」と「開いた道徳」の関係を語る場面に通して、見てとることができるであろう。⁽²⁰⁾

以上のことからわかるように、「記憶の潜在性」という発想にわれわれが読み込んだ「力」の機能は、それぞれの問題系において、錯綜する多様な「傾向 tendencies」のダイナミズムとその発露としての「創造 creation」を同時に捉えうるものとして、ベルクソン哲学を読み解く上で

ひたひたの導きの糸となりうる可能性を秘めてあるものなのである。⁽¹²⁾

以下に引用略号を示しておへ。DI: *Essai sur les données immédiates de la conscience* ; MM: *Matière et mémoire* ; EC: *L'évolution créatrice* ; DS: *Les deux sources de la morale et de la religion* ; ES: *L'énergie spirituelle* ; PM: *La pensée et le mouvant*. 尚' ヴーソー付けはすべてPUFの《Quadrige》版による。引用文中の「」は引用者による補足「…」は省略による。

(一) 概念としての「virtuel」に「いへ、いく大雑把に哲学史を振り返って見よう。——「virtuel」の語義は、少なくともスコラ哲学以前で言えば、*「現実態 en acte」*との対比における「可能態 en puissance」なる「*「潜勢態」*の概念とはほぼ同義である。アリストテレスの「*デユナシス dynamis*」(cf. 『形而上学』 1019a15-83) に遡るこの概念は、十二世紀以降、スコラ哲学のコンテクストをも部分的に取り込みつつ (cf. Thomas Aquinas, *Summa theologiae*, I, II, qq55)、『ライプニッツに於いて、現実態への傾向を内に孕みつつも未だ現実態ならざる可能態としての側面 (cf. Gottfried Wilhelm Leibniz, *Nouveaux essais sur l'entendement humain*, LivreI, Chap. 1, §5; *Discours de*

Métaphysique, §8, §13.) ヲ' 起動因としての力 puissance active の側面 (cf. *Nouveaux essais sur l'entendement humain*, LivreII, Chap. 21, §2.) とを併せ持つ概念として練り上げられたらざるべきであろう。尚' ヘルクソン哲学における「可能性」と「潜在性」の区別については本稿注16参照。

(二) 『物質と記憶』にこの読解、また同テクストにおける「潜在性」の観念について言及した研究書で最も信頼のおけるものとして、以下をあげておく。J. Hypollite, “Aspects divers de la mémoire chez Bergson”, in *Figures de la pensée philosophique*, PUF, 1991, pp. 468-488; G. Deleuze, *Le Bergsonisme*, Chap. 3, PUF, 1994, pp. 45-70. また、『物質と記憶』の詳細なコメントリーとしては以下のものがある。F. Worms, *Introduction à Matière et mémoire de Bergson*, PUF, 1997.

(三) 本稿では主題として取り上げることができなかったが、このような境界としての「純粹現在」にも、結局のところ、「持続の厚み」を認めないわけにはいかないだろう。ヘルクソンが他著『意識の直接与件についての試論』で論証しているように、観念的に想定された諸点の集合による時間の再構成は不条理でしかない。どれほど短い瞬間であっても、それが時間である限りは、やはり持続の厚みを有しているでなければならないからである。とはいえ、それ

はそれで、詳細かつ綿密な分析を要する問題であろう。

Cf. 石井敏夫『ベルクソンの記憶力理論』(理想社、二〇〇一年)、第三章「純粹知覚理論」, pp. 93-116.

(4) ベルクソンは、「現在の瞬間」をこのようなものと解するならば、「これはと存在しないものはない」(MM, 166)と述べている。Cf. ES, 136-137.

(5) 「[...] 諸々の感覚質の《主観性》は、何よりもまず、われわれの記憶によって遂行される、現実的なものの一種の収縮に存するものである。」(MM, 31)したがって、知覚機能の本質とはなよりもまず、無数の振動に還元される物質を保持しつつ、より巨視的な水準においてそれらを「ひとつの感覚質として」総括することにあるといえよう。「一秒の何分の一かの最小の知覚部分のうちにも、ひとつの感覚質のほとんど瞬間的な知覚のうちにも、何兆という振動が反復しているはずである。[...]、感覚質の恒常性は、無数の運動のかかる反復のうちに存している。知覚の第一の機能は、まさに一連の要素的变化を、ひとつの凝集の働きによって、質もしくは単なる状態というかたちで捉えることである。ある動物の種に分ち与えられた行動力が、大きければ大きいほど、その知覚能力が一瞬間に集中させうる要素的变化の数は、いうまでもなく、いっそう多くなる。」(EC, 300-301)

(6) 無論ベルクソンは、過去を過去として想起する再認についても綿密かつ豊かな議論を展開している。これについては『物質と記憶』第二章の注意的再認について論じている箇所を参照 (cf. MM, 107-128)。

(7) 厳密に言えば、「感覚」とは、われわれの「直接的過去」(MM, 167)である。

(8) 「習得された記憶は、学課が身につけられるにつれて、時間の外に出ていくだろう。」(MM, 88)

(9) 「それ『習慣』は、表象をなるとどうよりもむしろ、生きられ、『行動され』るものである」(MM, 86)

(10) より正確にいうならば、身体は記憶を「呼び寄せつつ制限する」機能を果たすものである。これについては次章で論じられる。

(11) ドゥルーズは、フロイトの「無意識」を「心理的」であるとした上で、これとの対比において、ベルクソンの「無意識」を「存在論的」な概念として位置づけている。G. Deleuze, *Le bergsonisme*, PUF, 1997, pp.50-51.

フロイトの「無意識」概念は、ヒステリー症状という病理学的な事例から出発して構想されたものであるがゆえにもっぱら「欲求」ならびにその欲求の「抑圧」というタームを用いてのみ、つまりそうした限定的な視点からのみ、観察され、記述されることになる。しかしおそらく、フロ

イトの語る「無意識」だけで、無意識という難解で——それは生誕当時には虚偽概念すれすれと見なされなえしていたのである (Cf. A. Lalande, *Vocabulaire technique et critique de la philosophie*, « Quadrige » / PUF, pp. 489-490) ——汲み尽くしえない広がりをもった事象のすべてを記述できるわけではない。ヘルクソンの「無意識」概念は、無意識について、あるいは私の——性ではなく——生そのものについて、そしてさらには「私たち」の生について、また違った視覚を提供することになるはずである。

(12) 逆に、過去を過去として意識すること、すなわち「過去をイマージュのかたちで喚起するためには、現在の行動を差し控えることができなければならない。」(MM, 87)

(13) 本稿では、「現在の呼びかけ」に「過去が呼応する」といった役割設定に焦点が当てられているが、『物質と記憶』全体での議論に関する限り、「現在／過去」に「呼びかけ／呼応」の図式を固定することよりもむしろ、過去(の記憶)と現在(の行動)との間の絶え間ない往来こそが自我の基盤となっているという主張に力点があるように思われる。Cf. MM, 181.

(14) 「外来的経験が精神に修正を加えてきたが、まったく同じように精神が外来的経験を修正してきた。こうしてあ

らゆる精神的実在は、その本性からして或る種の全体化の力 *vertu totalisante* を備えており、それによって、いかなる修正を強いられたらうと、これをことごとく呑みくだし、一歩進むたびに、自らを、全体的でありつつも、連続的に変貌させられる有機体として、構成し直していくのである。」(Vladimir Jankélévitch, *Henri Bergson*, « Quadrige » / PUF, p. 9)

(15) Cf. Jean Hyppolite, *Figures de la pensée philosophique*, Tome I, « Quadrige » / PUF, 1991, p.483.

(16) したがって、「潜在性」を「可能性」の別名のように扱うことは差し控えなければならない。「可能性」とは、結局のところ、時間の「不可逆性」「予見不可能性」を括弧に入れることで成立する、「現在」から「過去」への「波及効果」、つまりは「過去における現在の幻影」(PM, 113)に過ぎない。

(17) 関連箇所を挙げておこう。「[...] 極端なかたちの目的論には、事物や存在は、かつて描かれたプログラムを表現するに過ぎない、という考えが含まれている。[...] 機械論的な仮説におけるのと同様、ここでもやはり、すべては与えられている、ということが前提とされている。[...]」この目的論は、機械論と同様の要請から着想を得ている。ただ一つ異なる点をいえば、われわれの有限な知性が諸事

物の見かけだけの継起に沿って進むとき、目的論の方は、それをもってわれわれを導くと称するところの灯火を、われわれの背後に置かず、われわれの行く手にかざす。目的論は、過去の推進力に代えて未来の牽引力をもってするのである。」(EC, 39-40)

(18) 「これらの感情は、十分な深さにまで達していないとすれば、そのひとつひとつが、魂の全内容がひとつひとつに反映されているという意味において、魂全体を表わしているのである。」(DI, 124)

(19) 「たとえわれわれが過去についてはっきりした観念をもっていないときにも、われわれの過去が依然としてわれわれに現前していることを、われわれは漠然と感ずるのである。[...]われわれの過去は、そのほんの一部しか表象とならないにせよ、その推力によって、そして傾向というかたちで、全体として現われる。」(EC, 5)

(20) 『道徳と宗教の二源泉』において、「潜在性」のテーマは、例えば、形骸化してしまっている道徳的規則の根源的情動の「灰」という比喻において語られている。「われわれが目にはしているのは、燃焼した情動の灰なのである。[...]この灰を掻き立ててみよう。まだ熱が残っている部分がある。それはついには火花となってほとばしり、再び焰となって燃え上がるだろう。」(DS, 47)

(21) 実際、この観念のはらむ多産性は、ヘルクソン哲学の内にも留まることなく、現代においても、(特に生命論や科学的認識論などにおいて)多様な展開を見せつつあるものである。 Cf. Enrico Castelli Gattinara, *Les inquiétudes de la raison*, Vrin «EHESS», 1998. Kieth Ansell Pearson, *Philosophy and the adventure of the virtual*, Routledge, 2002.

一〇〇四年二月一〇日受稿
一〇〇五年 四月一日をへて掲載決定

(一橋大学大学院博士課程)